

龍子個展からみた青龍社の活動展開について  
— 第五回個展を中心に —

木村 拓也 大田区立龍子記念館

大正から昭和にかけて活躍した日本画家・川端龍子(1885-1966)は、豪放な筆致と破格のスケールの作品で広く知られている。龍子の画業を特徴づけるのは、1929年に自らの美術団体・青龍社を設立してからの活動である。青龍社において龍子は「会場藝術」を掲げ、「画業—展覧会—時代—観衆」の関係強化を目指した。特に1930年代の青龍社は大きく活動を展開しており、展覧会においては公募制や目録入場制を導入し、大阪への進出を遂げ、美術雑誌では院展と並んでとりあげられるほどの人気を博した。龍子の制作においては、戦時色が濃くなる中、時局性を反映した「太平洋」や「大陸策」といったテーマ性の強い連作を発表し始めている。

このように、青龍社の活動および龍子の制作が、1930年代に大きく展開したことについては、これまでも研究がなされてきたところである。しかし、同時代に青龍展と並行して開催された「龍子個展」についての言及は多くはみられない。龍子個展は1931年の開催を皮切りに、以降1940年の第十回まで開催された。個展開催に関しては、1934年から大阪で「龍子新作展」を開催するにあたり、「自発的なそれと区別する為に、この方は特に自分の新作展としてゐる」という龍子の姿勢から、何らかの画家の自発的な主張が込められたものであったことがわかる。そこで、個展の開催年に着目すると、青龍社と個展の活動展開に密接な関係性を見出すことができるのである。

まず、第一回龍子個展が開催された1931年に、青龍社の指針となる「会場藝術の主張」が発表された点を挙げるができる。次に、1933年の第三回龍子個展から「日光に題す」等の展覧会テーマを設定するようになると、同年の青龍展からテーマ主義による連作「太平洋」を発表し始めている。さらに、1935年には、第五回龍子個展、第七回青龍展ともに大阪へと進出を果たしたという共通点をもつ。そのため、青龍社が「会場藝術」を実践する中で、龍子個展は青龍展の前哨戦として大きな役割を担っていたと言えるのではないだろうか。1940年、第十二回青龍展における東京府美術館から日本橋三越への会場変更は、その最も象徴的な出来事である。日本橋三越は、龍子個展において第一回から使用されてきた会場であった。この会場変更によって、龍子個展を通じて用意周到に試みられてきた「大衆と芸術の接触」が、青龍展における「会場藝術」の実践に結びつけられたものと考えられるのである。

本発表では、帝展改組に美術界が紛糾した1935年、青龍展に先駆けて龍子が「青龍社の立場」を表明した第五回龍子個展を中心に再考し、個展と青龍社の活動との密接な関係性を検証する。そして、青龍展出品作のスケールの大きさだけにとどまらない龍子個展において試みられた「会場藝術」の一面を捉えなおしていきたい。

(きむら・たくや)